

2020 年度プロジェクト研究所業績報告書(中間報告)

プロジェクト名	ソーシャルデザインリーダーシップ(SDL)の開発・実践プロジェクト
研 究 所 名	実践女子大学ソーシャルデザインリーダーシップ研究所
設 置 開 始	2019. 4. 1
設 置 終 了	2022. 3. 31

<研究業績報告書>

今年度の研究計画の概要

本研究の目的は渋谷エリアを中心に、ソーシャルデザイン領域でのリーダーシップ、すなわち「ソーシャルデザインリーダーシップ(以下、SDL)」の機能を解明し、育成可能性を開発することにある。具体的には(1)SDLの理論的枠組み構築、(2)PBL科目やボランティアの履修者・学生スタッフへのアンケート調査・分析、(3)渋谷区役所や在渋谷企業などステークホルダーへの聞き取り調査やディスカッションによる渋谷版SDLの開発、(4)渋谷版SDL実践、を異分野融合および地域・産学連携によって実施し、渋谷におけるSDLのあり方およびその開発手法を実装する。2020年度には以下の活動を行う予定であった。

【理論的枠組み構築】2019年度に続き先行研究、世界各国の先端事例を収集・分析しつつ、本学におけるPBL科目・ボランティアなどでの実践とその調査・分析結果を踏まえたSDL概念を「渋谷におけるSDL」にカスタマイズしていく。

【SDL実践】2019年で準備したSDL実験(授業・オリンピック/パラリンピックボランティア含む)の履修者・学生スタッフ・参加学生を対象としたアンケート調査および分析を行う。

【地域・産学連携】2020年における実験についてフィードバック、討議による2021年度の実践に向けてブラッシュアップおよび準備を行う。

今年度の研究実績

【理論的枠組み構築】

2020年度はオンライン授業となり、大人数でのフィールドワークの実践とその調査・分析を行うことは十分にはできなかった。しかし限られた人数ではあったが、ボランティアと実践者がプロジェクトに関わる動機の違いとSDL発生の関係に関する観察、またそこからSDLを育成するために必要な要素について分析することができた。

COVID-19による社会変化としては「ワーケーション」への注目があつた。その中で、地域と企業が連携して社会課題解決に取り組むというモデルが見られたため、SDL活動として分析し、社会還元のための講演・取材対応などを展開した。企業・地域における自律人材の育成と機能に着目した調査・分析も徐々に進めている状況である。また、「オンラインでの活動」も2020

年度に見られた社会の変化であった。オンライン授業を体験することによって学習行動にどのような変化が見られるか調べた。授業開始当初と前期授業期間終了後にネット調査を行い、遠隔授業を受ける環境、学習の仕方などの変化を比較したが、大きな変化は見られなかった。小規模のオンライン活動を実施したところ、対面場面でのソーシャル・デザイン／リーダーシップ関連のスキルや課題に取り組む姿勢が、オンライン活動でもある程度有効である点が示唆された。

【SDL 実践について】

SDL を育成するために必要な要素を抽出するため、正課内・正課外ともに様々な実践活動を予定していた。正課内の PBL 科目はオンライン授業となったため、フィールドワークなど現地での活動を展開することはできなかった。正課外では、不特定多数の参加者を募り、参加者の行動によって作品が徐々に出来上がっていくアートワークショップを計画していた。こちらは実施することはできたが、コロナ禍で不特定多数の参加者が見込めず、限られた人数での実施となった。一方、2020 年度は COVID-19 対応として、ワーケーションやオンラインの進展など、社会の側に大きな変化が見られた。そこで、オンラインでの SDL への拡張を視野にして、小規模ではあるがオンラインでの PBL や、長期間のグループワークを試行し、その分析を試みた。

【地域・産学連携について】

渋谷区観光協会や渋谷区役所環境政策課の方々と SDL に関する聞き取りやコミュニケーションを行った。また渋谷カルチャーカルチャーでの YouTube 生配信「これからの渋谷を語る」シリーズにおいて、渋谷未来デザイン事務局や渋谷再開発協会の方と「オンラインとオフラインの融合」をテーマにコロナ禍における都市・渋谷のあり方をディスカッションするなど渋谷版 SDL のデザインについて聞き取りと関係構築を行った。宇宙芸術研究部会と共同で京都大学花山天文台の特別公開・宇宙と文化の日にアートイベントを実施した。限られた人数での参加とはなったが、一定の連携は実施できた。NEC・公共ソリューション事業部の方をゲスト講師に迎え、「シビックプライド (civicpride)」を鍵に今後のまちづくりのあり方を検討する PBL を実施した。

現在までの進捗状況

1. 事業計画の進捗度について (①～④のいずれかを選択してください)

①順調である ②おおむね順調である ③やや遅れている ④遅れている

※上記の進捗度を示す事由を記載のこと。「やや遅れている」「遅れている」とした場合は、改善点を記載。(計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること)

当初計画では本学における PBL 科目等で渋谷を対象としたフィールドワークを実施し、SDL に関する検討を進める予定であった。しかし、COVID-19 のためオンライン授業となり渋谷でのフィールドワークの実施が困難となった。Covid-19 対応は計画最終年度である 2021 年度にも必要となるため、当初計画のうち「渋谷における SDL の提示と実践(2020 年度)」と「渋谷における SDL 精緻化と完成(2021 年度)」を追求するための諸活動が実施困難となった。

一方、SDL の機能の解明や育成手法の開発という全体目的は、「渋谷」というフィールドに拘泥しなければ、追及可能である。また、COVID-19 を契機として諸活動のオンライン化が急速に進んだ。オンライン活動は今後も発展を続けることが予想され、今後、テレワークやオンライ

ンイベントなどがますます盛んになるであろう。社会の在り方もかわり、リアル（対面）場面で活動とオンライン上での活動が混在したものになっていくと予想される。すでにゲームやプログラマーの中では構築されつつあるが、オンライン上のみでの社会も構築されていく。結果的にオンラインでのソーシャルデザイン・リーダーシップは急速に重要となってきた。本プロジェクト研究所は、渋谷エリアを中心としたソーシャルデザイン領域でのリーダーシップ（SDL）の解明と育成を目的としたものであった。しかし、今般の急速な社会の変化を踏まえ、オンライン上での活動も含めたソーシャルデザイン領域でのリーダーシップへと射程を拡大する全体目標は維持したままで当初計画を一部変更し、「オンラインでの SDL」の機能解明と育成手法の開発を目指す。

2. 目標達成状況について（①～④のいずれかを選択してください）

① 達成した ② おおむね達成した ③ 十分達成されたとはいえない ④ 未達成である

※上記の目標達成状況を示す事由を記載のこと。「十分達成されたとはいえない」「未達成である」とした場合は、改善点を記載。（計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること）

本研究の具体的な達成目標は、SDL の理論的枠組み構築、PBL 科目やボランティアの履修者・学生スタッフへのアンケート調査・分析、渋谷区役所や在渋谷企業などステークホルダーへの聞き取り調査やディスカッションによる渋谷版 SDL の開発、渋谷版 SDL 実践の 4 点である。COVID-19 の影響により、特に渋谷版 SDL の開発、渋谷版 SDL 実践は、試みを続けているが、十分に達成できたとは言えない。上記「進捗度」でも記載したように、全体目標は維持したままで、オンラインでの SDL も視野に入れた活動へと計画を変更する。

取り組み状況について

1. 組織的な取り組みができているか（①～④のいずれかを選択してください）

① できている ② おおむねできている ③ あまりできていない ④ できていない

※上記を示す事由を記載のこと。「あまりできていない」「できていない」とした場合は、改善点を記載。

上記「進捗状況」に記載の通り、計画の変更に伴う再調整がやむを得ない状況である。その中でも、研究員メンバーがそれぞれ事例収集、ワークショップの実施などを分担して行っており、おおむねは組織的な取り組みができていると考える。

2. 研究所メンバーの活動状況について

※分担された役割を含めた活動状況をメンバーごとに記載してください。

・ 粟津俊二

（オンラインの）SDL に関する調査項目の試作、調査実施、分析

・ 原田謙

（ソーシャル領域での）フィールドワーク、ワークショップの実施

・ 下山肇

（デザイン領域での）ワークショップの実施

・ 松下慶太

（コミュニケーション領域での）ワークショップの実施、SDL の理論的検討

・ 舘野 泰一

リーダーシップに関する調査・研究、および海外事例調査

成果について

1. 波及効果が見込まれる成果が得られているか

※上記の状況を示す事由を記載のこと。(波及効果については、主に事業終了後の発展を問うものであるため、設置申請書で示した波及効果および教育又は社会に還元するために得られる知見に対し、現在の見込みを記載してください。申請時との差異がある場合も、その旨記載してください。)

本研究の波及効果および教育・社会に還元しうる知見としては、主に以下の2点である。

・SDLの機能解明および開発手法：SDL育成に関する正課内外の取り組みが、渋谷地域やオンラインでの活動にどの程度有効か、どのように改善・修正すべきかが判明する。さまざまなSDL、PBL、ワークショップなどの実践を通して知見が蓄積されており、教育への還元と確認が進められている。また講演や取材対応などを通して社会的な波及も展開されている。今後も継続して、還元、波及が行われる予定である。

・地域・産業との連携：渋谷あるいは他地域の自治体や企業、団体との連携活動を実施することで、相互の結びつきが形成されている。これは、本研究の終了後にも維持されるであろう。

以上のことから、事業終了後の波及効果が見込まれる成果が上がっていると判断する。

2. 雑誌、学会発表、図書など

【著書】

・原田謙(2020)『「幸福な老い」と世代間関係——職場と地域におけるエイジズム調査分析』勁草書房。

・松下慶太『ワークスタイル・アフターコロナ』(イースト・プレス、2021)

・Keita MATSUSHITA (2021) Workations and Their Impact on the Local Area in Japan. In: Orel M., Dvouletý O., Ratten V. (eds) The Flexible Workplace. Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-030-62167-4_12

【制作物】

・下山肇(2020)『太陽の蝶形庭/ Butterfly Garden in the Sun』(共同/宇宙芸術研究部会) 京都大学花山天文台 特別公開・宇宙と文化の日 2020年10月23日~11月18日

・下山肇(2021)『高齢者×若者のい・ろ・は 相詠みかるた』実践女子学園

・下山肇(2021)『実践女子大学2021年度履修要項表紙』実践女子大学

【学術論文】

・粟津俊二, 鈴木明夫 (2020) 第二言語低熟達者による第二言語文理解の身体性. 認知科学 27(4) 554-566.

【学会等発表】

・粟津俊二, 新垣紀子, 阿部慶賀. オンラインにおける学習と対話(企画・司会), 日本認知科学

会「学習と対話」第57回研究分科会.

・黒田航, 阿部慶賀, 粟津俊二, 寺井あすか, & 土屋智行. (2020). ARDJ で使用した文に対する反応時間の取得とその多変量解析. 日本認知科学会第37回, 919-928.

・原田謙 (2020)「東京で暮らす中高年者の居住満足度——地域環境は影響するのか？」第38回日本都市社会学会

・MATSUSHITA, Keita (2021) "Community of Styles" Among Young Workers and Regional Migrants in Local Areas in Japan", IV ISA Forum of Sociology, online.

・松下慶太 (2021) 半径 5m から始まるリーダーシップ —ソーシャル・イノベーションのためのリーダーシップとは?— 高崎経済大学「現代の地域におけるリーダーシップのあり方の研究」プロジェクト研究会

・松下慶太 (2021)「新しいタイプのワークプレイスの潮流を展望する」第18回 UII まちづくりフォーラム「都市近郊の自然を活かしたワークプレイスの意義と構築について考える」

・松下慶太 (2021)「ワーケーションを通じた地域連携」まちづくりワーケーションフォーラム (鳥取県)

・松下慶太 (2020)「個人・企業・地域における本質的なワーケーションの価値」「旅するようにワーケーション」パソナ JOB HUB

・松下慶太 (2020)「新たな働き方としてのワーケーション」日本・中国青年親善交流事業 (内閣府)

・松下慶太 (2020)「新しい働き方としてのワーケーションと最新動向」とっとり発ワーケーションセミナー

・松下慶太 (2020)「ワーケーションについて」WAJ: 日本ワーケーション自治体協議会セミナー

・下山肇 (2020)「太陽に触れる蝶の庭 - 京都大学花山天文台との協働」環境芸術学会 第21回大会.

・下山肇 (2020)「花山天文台と庭—開かれた空間づくり」京都大学宇宙総合学研究所ユニット 第14回宇宙ユニットシンポジウム 「人類は宇宙に居住できるのか?—宇宙生物学を踏まえた教育と展望—」

【メディア掲載等】

・松下慶太 寄稿「ワーケーションの展開」Point of View (労務時報)

・松下慶太 座談会記録「ニューノーマル時代の不動産のあり方を考える」不動産鑑定4月号

・松下慶太 インタビュー記事:「いま注目のワーケーションとは」みずほプレミアムクラブ

・松下慶太 インタビュー記事:「ワーケーション施設がハブになり地域の魅力創出が重要」『ハウジング・トリビューン』2020年20号

・松下慶太 対談:「ワーケーションは、どこで働くのが一番効率的で幸福かを考えた結果」Loftwork

・松下慶太 講演:「ワークプレイスは『つながる』場所から『重ねる』場所へ」2021 KOKUYO FAIR

・松下慶太 講演:「ワーケーションの展開に向けて」ひがし北海道で考えるワーケーションシンポジウム

- ・松下慶太 インタビュー記事：「広がる『ワーケーション』——ユーザーのインサイトとは？」
BAE
- ・松下慶太 インタビュー記事：「ワーケーション実践のススメ」ダイワハウス・サステナブル
ジャーニー
- ・松下慶太 インタビュー記事：「日本独自の進化を遂げつつある『ワーケーション』」WORK MILL
- ・松下慶太 対談：「『非日常』を働く時間に取り入れる新しいワークスタイル」Howlive
- ・下山肇 新聞記事：『カルタで多世代交流』 毎日新聞 東京都内版 2021年3月8日朝刊
- ・下山肇 記事：『あすとろん』Vol. 53 P. 33, 34
- ・下山肇 イベント紹介：『社会連携 京大ウィークス 2020の期間中に全国各地19施設が公開
イベントを行いました。(2020年10月3日～11月14日)』 京都大学 Website
- ・下山肇 新聞記事：『カルタで多世代交流 実践女子大と毎日新聞社、意見交換 /東京』
毎日新聞 Website